

訪問看護ステーションにおける がん患者の課題と対策

北見地域のがん患者さん支援の充実に向けたセミナー2023

訪問看護ステーションタッチケア
管理者 澁谷順子

2

訪問看護の需要は増加傾向

- ▶ 依頼を受ける訪問看護ステーションが見つからないという声を聴く
- ▶ 介護保険を利用した定期的な訪問のみならず
- ▶ 医療保険で、訪問間隔も不定期な患者が増加
- ▶ 特に50代から60代の利用者の増加
- ▶ 医療保険の利用者は圧倒的ながんの終末期の方が多い

3

訪問看護を利用するがん患者の特徴

1. ADLが急激に低下する
2. 金銭的な負担が大きい
3. 関係事業所との密な連携の必要性が高い

4

ADLが急激に低下

- ▶ お亡くなりになる1週間から数日前に、ADLが急激に低下する
- ▶ 早期は訪問看護の体調確認や療養の相談での訪問が多く、認定結果が自立または介護予防(要支援)が多い
- ▶ 認定が下りるまで日数がかかり、介護用のベッドを利用したくても自費になる
- ▶ 歩行器、車いす等の福祉用具が必要で、福祉用具貸与事業所に「今日明日中に」と無理なお願い
- ▶ 数日遅れるとレンタルしても使用せず終わることも
- ▶ ご家族も急に動けなくなってしまうことに対し戸惑いが大きい

5

金銭的な負担が大きい

- ▶ 現役世代は3割負担で上限額が高い
- ▶ 本人は利用料のことを考え、利用を控えることがある
- ▶ 「いつでも連絡してください」と説明しても、結局受診になるならまっすぐ外来へ
- ▶ 経済的な問題は個々それぞれに違うデリケートな問題、対応が難しい

6

関係事業所との密な連携の必要性が高い

- ▶ がんの終末期の病状、症状の変化は多様
- ▶ 痛みやADLの変化に応じて予測し対応するように努力しているが、予想より早かったり、予想外のことが起きる
- ▶ 主治医へ指示の確認を依頼することも多い
- ▶ 連絡または連携を図るのは病院(主治医、外来看護師、MSW他)、介護支援専門員、福祉用具貸与事業所
- ▶ 介護保険未申請の場合は包括支援センターへ申請代行の依頼

7

こころに残る連携の事例

- ▶ 高齢者世帯で、癌の終末期の夫を妻が一人で介護していた。
- ▶ トイレは何とか一人で行くことができていたが、訪問に行くと急激にADLが低下し、妻が支えてやっとトイレへ行っていた。
- ▶ すぐに介護支援専門員へ連絡し、できれば今日、無理なら明日にでも早急にと介護用の車いすの手配を依頼した。
- ▶ 当日の夕方車いすを持ってきていただき、その日の夜と翌朝の2回使用、翌日からは起きられず、ご自宅で永眠された。
- ▶ 奥様は、ほぼ最期まで「トイレへ行きたい」という希望に沿った介護ができたことをとても喜んでいた。

8

訪問看護師は

- ▶ 情報提供し問題を洗い出し
- ▶ 限りある時間を少しでも安全、安楽に過ごすことができ
- ▶ 望む最期を迎えることが出来るようにサポートする
- ▶ 多職種で連携